

「おかあさんの手」

奥本 真羽おくもと まの

「ゴホツゴホツ。」
と、いつものせきが出てきました。

「また出てきたなあ。いつになったらなおるんかなあ。」

と、おかあさんがためいきをつきながら言いました。

わたしは、三さいのころから、なんどもなんども、はいえんになっていきます。おかあさんに、ばいきんをころす力がよわいと教えてもらいました。よるは、体がもえそうなくらいのねつが出て、せきでむねがいたくてぜんぜんねむれません。

「いたいよ、しんどいよ。」

と言うと、おかあさんは、

「かわってあげれんでごめんなあ。」

と言って、あさまでせ中をさすってくれました。体があつくても、おかあさんの手があたたかいのは、よくわかりました。

びょういんに行くと、けんさや点できで、はりがわたしの体をさします。

「いたいよ、やだよ。」

と言ってあげられると、おかあさんは、わたしの体をおさえつけます。その時のおかあさんの手は大つきらいで、たくさんあはれてなきました。点できをしている間、おかあさんは、いつもわたしの手をにぎって、ねむっていました。おかあさんの手

は、やつぱりあたたかくて、はりのいたさなんて、わすれることができませんでした。

同じような日が、一年、二年、三年、とつづいて、わたしは、小学校一年生になりました。そのころには、くすりをのみながらでも、元気に学校へ行くことができました。おかあさんは、

「元気に学校に行けるってありがたいなあ。みんなで、ごはんたべられるってありがたいなあ。」

と、ありがたいが口ぐせになりました。今でもわたしは、びょういんに通っています。でも、前よりずっと元気になりました。

おかあさん、わたしね、おかあさんの手が大ききだよ。おしいごはんをつくってくれる手、よるねる時に絵本を読んでもくくれる手。でも、おかたづけしないと、おしりをパシッとたたく手、にがいくすりをのませしてくれる手は、ちよつとにが手だけどね。わたし、元気になったよ。いっぱいべんきょうできるし、いっぱいあそべるし、いっぱいたべられるよ。おかあさんにこまったことがあったら、こんどは、わたしがおかあさんの手を、ぎゅうつてにぎるからね。せつたいはなさないからね。

いつも、いつも、あたたかい手で、わたしをつつんでくれてありがとう。